

H20 年全国町村長大会・意見発表 稲葉 暉 岩手県一戸町長

今まさに風雲急を告げているときであります。本日は町村の基本を見据えながら、我々が今後立脚すべき原理・原則のお話しをさせていただきたいと思います。

我々を取り巻く状況は、混迷一色、迷走一色と表現すべきものです。20世紀から21世紀までを通して営々として続いてきた世界的な経済成長神話、市場万能神話が崩れつつあります。その神話の中心であったアメリカが思いがけない脆さを露呈しているわけです。今までもアメリカがくしゃみをすれば日本が風邪を引くのは常であったわけですが、アメリカが肺炎を起こしておれば、いったい日本はどうなるのでしょうか。我々町村の地方経済に対する影響が懸念されるどころです。

一方、国内はどうでしょうか。やっと国民のための二大政党政治になったといわれながら、国政は全く機能不全に陥っているとしかいいようがありません。短期的な景気対策として有効なものが出ないだけでなく、我々市町村に「定額給付金」の支給方法を丸投げする等の迷走ぶりです。

国民が真に望んでいるしっかりとした社会保障の提示もどの政党からも出ていないのです。加えて問題なのは、基礎自治体の財政健全化を我々市町村に指導している各都道府県の大規模な不正経理の発覚です。残念というより、誠にあきれ果てた笑止千万というほかありません。

高度成長の時代、我々町村は、その成長の果実を都市部とは遅れて受け取りながら、国家のため人材の育成に努め、条件不利により誠に控えめな便宜の享受に甘んじながら、食料の生産、環境の保全に身を捧げてきました。また強固な中央集権体制の下で、上部指導機関である、国、都道府県の指示に万事従ってきたのです。その結果がこの迷走なのです。誰の責任なのでしょうか。少なくとも市町村ではありません。誰がこの混迷の中で途を切り開けるのでしょうか。もはや市場主義のグローバリズムが切り札ではないことは、あきらかです。

この際、地域がそれぞれの自給の力を見直すことが、正しい途であることがあきらかだと思われまます。このときの主役は国でも都道府県でもない、やはり基礎自治体である市町村です。しかも本当に小回りのきく形で創意工夫ができ、試行錯誤の実をあげられる町村が先導役にふさわしいと思われまます。我々はこのことに自覚と誇りを深めようではありませんか。

国政だけに任せておいては先の見えない社会保障の現状を見るにつけ、現場の第一線で直接住民の健康や生命、暮らしのサポートをしている基礎自治体の政策決定への直接参加が不可欠であることは、ますますあきらかになってきています。この分野でも町村の使命の重さは、大規模自治体に較べはるかに大きくなっています。

いまふたつほどこれからの町村の貴重な役割を述べさせていただきましたが、

その他の多くの分野でも町村の役割は高まる一方です。しかるに大きいことはよいことだとする妖怪がこの国ではうごめいています。二大政党とも市町村数をま
ず千にして、さらに千から七百とか、三百が望ましいとする勢力が幅をきかせて
いるではありませんか。これは破綻した市場万能主義と同じく、まったく洞察を
欠いた考えと断ぜざるを得ません。いま町村は数の上では劣勢となりつつありま
す。しかし歴史的に見てもしっかりとしたものの原理に立脚し、先見の明を持ち
果敢な挑戦をいとわない町村が、新しい局面を動かしてきたことは紛れもない事
実です。この大会において次のことを確認し、宣言したいと思います。

一、国または国政にたずさわるものは、町村に合併の強制をしないことはもちろ
ん、町村の価値ある可能性を正しく評価し、しっかりと位置づけること。

一、地方行財政会議(仮称)を速やかに設置し、行き詰まった状況を打破すること。
特に町村の地域経営上培われた貴重な経験、ノウハウを重要視すること。

一、このように価値ある町村の活動の財政的保証を何よりも優先すること。

以上、私見を述べて発表に変えます。